

(国語)

「共に課題を見つけ、学びを活用する子の育成」

—系統性を意識した授業づくり—

大阪市立矢田小学校 学力保障委員会

1. 研究主題設定の理由

本校は、「仲間と協力し、自ら学び続ける態度と意欲を高め、自他を思いやる心を育てる」を学校教育目標に掲げ、一人ひとりを大切にする人権教育を基盤とした教育活動を展開している。

本校の子どもたちは、興味をもったことに関しては、意欲的に学習に取り組む様子が見られる。しかし、難しい課題に対して粘り強く取り組み、学び続ける姿勢に関しては課題が残る。また、学んだことを次の学習や生活に活かすことができた経験が少ないために、学習することの有用性を感じることができない子どもも多にいる。そのような実態から、学習課題を自分ごととして捉えて学習に取り組む子どもたちを育成する授業展開が必要になると考えた。

そこで、研究主題を「共に課題を見つけ、学びを活用する子の育成」と設定した。国語科を重点教科にして授業研究を進め、仲間と課題を共有し協働的に学び、学んだことを活用する力の育成を図ることにした。前年度までの研究において、子どもたちの国語科への学習意欲を喚起できるようになった。本年度は、友だちとの対話的活動を通し、子どもたちが持っている思考を活用してさらにその思考を高められるように研究を進めてきた。

2. 研究の趣旨

子どもたちの学びは、その時その学年だけで完結するのではなく、それまでの学びを活かして次の学びに向かっていき、新たな学びへとつながるというサイクルができることで、定着していく。

そのため、研究を進めるにおいては、担当する学年の内容だけを見て授業をするのではなく、「系統性」を意識した指導を追求していくことにした。研究授業を行う際には、低・高2つの学年が同じ時間に同じ系統の単元の授業を行う。参観者は、2つの教室を行き来しながら、系統性・つながりについても見ることで、一人ひとりが今後の授業に活かすことを意識できるようにした。

そうすることで、学びが一部の学年だけにとどまらず、「学びのスパイラルアップ」につながり、学校全体の教育力・学力の向上につながると考えた。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 共に課題を見つけ、学びを活用する子の育成

○学んだことを活用する場の設定

子どもたちは、指導者に与えられた課題よりも、自分たちで見つけた課題の方が解決したいという意欲が出て、共に学びに向かい合うことができる。また、課題解決の途中や解決後に、学んだことを「活用」する場面を多く設定することで、学んだことの価値や良さを感じられ、次の課題に向かう意欲が上がると考える。前年度までは、課題に出会う場面に重点をおいて授業づくりを進めてきたため、子どもたちが「これからどのような学習をするのか」ということに興味をもつ姿が見られるようになった。本年度はさらに、学んだことを活かし、習得した知識や技能を「活用する」ことに重点を置いた授業展開を工夫することとした。

視点② 子どもどうしの関わりを活かす

○他者を意識した学び

子ども同士の関わり場面を設定し、協力して1つの課題を解決したり、話し合ったり、教え合ったりできるようにすることで、子どもたちは新たな見方を発見し、諦めずに粘り強く学び続けることができる。また、相手意識をもって話し方や内容を考え、交流や発表をするという他者を意識した学びをすることで、自分の意見を深めることにもつながると考えた。昨年度までの研究では、子ども同士の関わり合いの場面を多く設定するようにしてきた結果、ペア活動などに積極的に取り組めるようになった。しかし、それによって思考が深まったり広がったりするまでには至っていなかった。そこで、本年度は、他者を意識した学びをすることで、話し合いの内容や子どもたちの思考が深まるようにすることを目指した。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の視点① 「共に課題を見つけ、学びを活用する子の育成」について

2学年同時に同じ系統の単元で授業をすることで、発達段階に応じた学習目標が明確になり、教職員同士でも授業について議論する機会が増えて視点が深まった。授業者だけではなく、全教職員が自分自身の授業との系統性を考えながら、参観・討議をすることができた。

課題を見つける段階では、身近なテーマを提示したことで、どの子も自分の意見やそう考える理由を明確にし、表現することができた。また、子どもたちの初発の感想をもとに単元を貫く課題を設定したことで、課題を解決したいという気持ちが高まり、自分事として学習に向き合う姿が見られるようになった。単元の学習の終わりには学んだことを活用する場面を設定した。単元の学習のはじめに学習の流れを示し、「学習のゴールは学んだことを活かして表現することだ」ということを共有した。それによって、子どもたちは学習することの有用性を感じて意欲的に取り組むことができた。

今後は、他の単元においても系統性に着目し、学習内容のつながりを考えながら授業づくりをしていくことで、さらなる「学びのスパイラルアップ」を図っていきたい。また、今後本格的に実施される「大阪市総合的読解力」とも関連させながら、カリキュラムマネジメントをしていきたい。

(2) 研究の視点② 「子ども同士の関わりを活かす」について

子どもたち同士の関わりを活かす方法として、対話的活動を多く取り入れるようにし、話し合いの内容や質を重視した指導を行ってきた。対話的活動においても、系統だてた指導を行うこととし、学習指導要領や学年の学習内容をみながら低学年・中学年・高学年ごとに「話すこと」「聞くこと」の目標を設定した。また、設定した目標をもとに、子どもの実態や発達段階、育てたい力などを考えながら話型を作成した。話型を継続的に、日常的に取り入れるようにした結果、つながる話し合いができるようになった。話すだけ、聞くだけの一方通行の話し合いではなく、研究の視点として目指す他者を意識した双方向の話し合いになってきた。子どもたちの発言から、自分の意見と比べたり共感したりしながら、思考を深め・広げている様子が見えてきた。

今後に対話的活動を系統的に、そして教科横断的に取り入れていけるようにする。また、子ども同士の関わりを学校生活全体に活かしていくことで、学校教育目標の達成につなげていけるようにしたい。